

『物語二百番歌合』論

―『百番歌合』旅部における相異と融合―

山本美紀

要旨

藤原定家撰『物語二百番歌合』は、物語歌による最初の歌合だが、当時、物語歌は現実の和歌と同等ではなかった。つまり、評価の定まらなかった物語歌を、同時期に盛行していた歌合の形式で表出したのが、この作品だったと考えることが出来る。この作品の前半は「百番歌合」と呼ばれ、左方に『源氏物語』（以下、『源氏』）、右方に『狭衣物語』（以下、『狭衣』）の歌々を用いている。『源氏』に番えられているのが『狭衣』であることは、当時の同作品の評価の証だが、「百番歌合」に旅部が設けられている点には注意したい。『狭衣』に旅を描く記事はない。つまり、須磨・明石流離譚において旅のモチーフを内在させる『源氏』と、

それを有さない『狭衣』とが、ここでは対峙させられているのである。須磨・明石を擁する『源氏』から歌を採る以上、「旅部」は不可欠だったろう。だが、そこに旅を描かない『狭衣』を番わせては軋みが避けられない。旅を描く作品とそうでない作品。だが、この歌合では、その異質な両者から抜き取った歌々に、通底する認識が窺える。この旅部は、旅という言葉に関して異なった認識を持つはずの二つの物語を、あえて接触させたあわいの上に成り立っている。無関係の文脈下に生成された歌々を番わせることによって、新たな境地を作り出す。本稿は、異質な作品の融合が造形した独自の精神性を、歌合の内部から析出するものである。

キーワード…相異、融合、宙づり

『物語二百番歌合』は、『源氏物語』と散逸物語を含む十一篇の物語歌を番えて歌合とした最初の作品と言われる。しかし、物語の二義的なものと考えられ、あるいは、散逸物語の欠陥箇所を補う補助文献として使用されてきたため、多くの研究がされているとは言えず、成立論が主であると言える。

『物語二百番歌合』の内容を論じるものとしては、早くに樋口芳麻呂氏が「源氏狭衣百番歌合は、既存の物語の歌を素材にするにすぎないが、オリジナルな物語歌合となり得ているように思われる。」と述べ、田淵句美子氏も「歌道家の中軸である定家としては、歌合歌とは相反するメディアである物語歌をも、公儀性の強い文芸形式である歌合に取り込んで再構成して見せるという、挑戦的な戦略であった。」などと述べている。『物語二百番歌合』は、当時において独創的で挑戦的なものであり、田淵氏が指摘しているように、当時流行期にあった歌合と、当時まだ評価の定まらなかった物語歌という、二つの要素を見ることができる。『物語二百番歌合』は異なる立場にあるものの融合から成っているとも言えよう。

だがそれらの特徴は、『物語二百番歌合』は『源氏物語』から選ばれた歌と、『狭衣物語』から選ばれた歌を番えた作品という、その二義的と捉えられかねない定義の前で崩れてしまう。その証左として、樋口氏の「(前略)歌合において左は右よりも重んぜられており、とくに一番左の位置は重いから、定家が『源氏物語』の歌を左に、『狭衣物語』の歌を右に配している以上は、『狭衣物語』の歌よりも、『源氏物語』の歌に優位を認めていることは明白であり、(後略)」や、東野泰子氏の「『源氏物語』の詞書が、言葉を意図的に選択し、改変することによって、番・配列を形成しているということは、源氏物語から創られた詞書においても確認することができる。ただこれら源氏から創られた詞書の場合に見過ごすことができないのは、狭衣物語の場合と違って、あくまで源氏物語を尊重する立場から創られている点である。」などのような、『源氏物語』優位の論があげられている。この源氏優位は覆されることなく現在に至っている。

歌数においても『源氏物語』の総歌数は七九五首、『狭衣物語』は二〇〇数十首、『夜の寝覚』は九一首と、『源氏物語』の歌数は抜きんでいる。左記の表は「百番歌合」「後百番歌合」の歌数を、所収巻別に表にしたものである。

狭衣物語	
卷 1	28
卷 2	24
卷 3	25
卷 4	23

源氏物語	
桐壺	4
空蟬	1
夕顔	6
若紫	2
末摘花	1
紅葉賀	2
花宴	3
葵	3
賢木	7
須磨	13
明石	5
落標	1
蓬生	1
松風	1
薄雲	2
朝顔	2
胡蝶	1
螢	1
野分	2
行幸	1
藤袴	3
藤裏葉	2
若葉上	1
柏木	2
横笛	1
夕霧	3
御法	2
幻	4
橋姫	4
椎本	2
総角	2
早蕨	1
宿木	2
東屋	1
浮舟	5
手習	6

『源氏物語』の歌はさまざまな巻から撰ばれているのに対し、『狭衣物語』の歌は全巻からはほぼ均等数が撰出されている。このことは、歌数の多い『源氏物語』から歌を選び、それに『狭衣物語』の歌を合わせているという樋口氏や東野氏の指摘の証左とも言え、その『源氏物語』優位を定家の制作意識とすることもできよう。しかし、『物語二百番歌合』は、『源氏物語』と、『狭衣物語』や『夜の寝覚』などの十一篇の物語歌からなる作品であり、それは当然十一篇の物語が欠けては、『源氏物語』の歌に結番する歌がなく、『物語二百番歌合』が成立しないことを示している。『源氏物語』と十一篇の物語は『物語二百番歌合』を構成する同質の要素であり、歌数や巻数などの分量や数量によってどちらの要素が優位だということとはできない。

しかし、差があると感じさせてしまう部立が『物語二百番歌合』にはある。それは、『百番歌合』旅部である。旅は須磨・明石流離譚を持つ『源氏物語』に欠かすことのできないモチーフである。が、その『源氏物語』に番えられた『狭衣物語』には、『源氏物語』の旅に類する旅の描写を見ることができず、『源氏物語』歌に結番されている『狭衣物語』歌は、筑紫へ連れ出された飛鳥井の歌や、一品の宮邸から退出した際の狭衣の歌などが撰ばれている。当時においては、家を離れることも旅とするため、差はないとも言えようが、その様相にはやはり違いを感じざるを得ない。旅部は、旅のモチーフを内在させる『源氏物語』と、それを有さない『狭衣物語』という、立場を異とするふたつの作品が番えられて成っているのである。

これについて樋口芳麻呂氏は「恋部に続いて旅部が設けられているのは、源氏物語中に、光源氏が須磨・明石で足掛け三年の歳月を過ごすという変化に富んだ、しかも物語の構想の上でも無視できない記事が含まれているからであ

らう。」と述べており、また、「別部・旅部・哀傷部については、それぞれの部に属する番数、歌数も少なく、さすがの定家をもつてしても、類似する二首を結番するだけで精一杯で、首尾の照応にまで留意する余力は残っていないようであるが（後略）」と論究している。

確かに、一見すると『源氏物語』と『狭衣物語』の間に共通項は見受けられない。しかし、『源氏物語』の重要な要素であるという理由だけで、本当にこの部立は成立したのであるか。『物語二百番歌合』は、それぞれの物語から歌を選び、番えたひとつの作品である。いくら旅のモチーフを内在させる『源氏物語』があろうと、『狭衣物語』という番えられる作品がなければ「百番歌合」の旅部として成立しない。それぞれの歌に目を向け、それぞれの物語へ目を向けることで初めて、『物語二百番歌合』を検討することができるのではないだろうか。

二

そもそも、『源氏物語』優位という発想がなされる背景には、『源氏物語』と『狭衣物語』の類似性が関係していると推測できる。『源氏物語』と『狭衣物語』の類似性については、既に諸氏により指摘されている通りであり、今

さらここで述べる必要はないであろう。その、『源氏物語』に類似する物語としての『狭衣物語』という意識は、「百番歌合」を「百番歌合」という作品そのままではなく、『源氏物語』と『狭衣物語』の歌が番えられた歌合として見せしてしまう可能性が高い。そうであるがゆえに、旅部という部立の存在についても、『源氏物語』にはあるけれども、『狭衣物語』にはないモチーフをなぜ部立として立てるのか」という違和感を覚えさせてしまう。

それは番内部の歌においても同じことが言える。左記は「百番歌合」四十九番の番である。⁽⁹⁾

四十九番

左 宰相中将ときこえし時、須磨の浦にまうでて急ぎ帰る 前太政大臣

飽かなくにかりの常世を立ち別れ花の都に道やまどはむ
右 一品の宮に初めて参らせ給へりける暁、一条の宮に
ひとところながめおはしまして

知らせばや常世離れし雁がねの思ひのほか恋ひてなく
音を

左が宰相中将、かつての頭中将の歌で、右が狭衣の歌である。『源氏物語』と、『源氏物語』に類似する『狭衣物語』

という二つの物語から撰ばれた歌の番であるとの前提は、おそらく二首の共通点を探しやすくさせる。それぞれの歌を見てまず気づくのは、二重傍線で示した同一の句語の使用による、同一の音感であろう。音の相似は二首の共通点としてまず捉えられる。

そのように共通点を見つけると同時に思うのは、『源氏物語』の優位性である。なぜならば、旅というテーマにおいて、左の宰相中将の須磨来訪という『源氏物語』歌と、右の一品宮邸から退出した後の歌という『狭衣物語』では、明らかに『源氏物語』の方が旅に則しているからだ。『源氏物語』と『狭衣物語』の類似性を知っており、その二首が番えられていると解しているからこそ、『源氏物語』が優位だと感じてしまう。誘発させているのは、二つの物語の関係性を知る知識と言えよう。

だが、そのようにして共通点と『源氏物語』の優位性を見つけた読み手は次の段階へ進むことになる。それは、「この歌は物語のどのような場面の歌で、どうしてこの二首が番えられているのか。」ということである。読み手が次に取る行動は、歌の収められた物語を紐解くことだ。物語の本文は次に示すとおりである。¹⁰

宰相中将、須磨の光源氏のもとを訪れる

¹夜もすがらまどろまず文作り明かしたまふ。さ言ひながら、ものの聞こえをつつみて、急ぎ帰したまふ、いとかなかなり、御土器まゐりて、

²「酔ひの悲しび涙瀧く春の盃の裏」ともろ声に誦じたまふ。⁴御供の人も涙をながす。おのがじしはつかなる別れ惜しむべかめり。朝ぼらけの空に、雁連れて渡る。主の君、

ふる里をいづれの春か行きて見んらやましきは帰るかりがね宰相さらに立ち出ん心地せで、

あかなくに雁の常世を立ち別れ花のみやこに道やまどはむさるべき都の苞など、よしあるさまにてあり。

〔『源氏物語』須磨・二二四頁〕

狭衣、一品の宮と結婚するも、女二宮への思いを絶ちがたく思う

悩ましさにことつけて、¹夜深く出でたまふ。一条の宮におはしぬ。まだ夜深くて、起きたる人なければ、手づから格子一間上げたまひて、やがて眺め臥したまへるに、³「雁のあまた連ねて鳴き渡るを」と、独りごちたまひて、²「青苔の色の紙」と誦じたまふ御けはひ、帝の御妹と言ふとも、世の常ならんはことわりなる御あり

さまなり。

聞かせばや常世離れし雁がねの思ひの外に恋ひて鳴く
音をと、独りごちたまふも、⁴ 聞く人なかりけるぞかひ
なかりけり。

『狭衣物語』 卷三・一〇五頁

それぞれの傍線部1では晩前と思われる、似た時間の記述が見て取れる。さらに、下線部2はともに漢詩の引用箇所となる。『源氏物語』の引用詩は、白楽天が謫所で親友の元稹と作った一句であり、『狭衣物語』の引用詩は、『和漢朗詠集』などにも収められた菅原道真の一句である。漢詩の引用という共通点も、二つの物語からはうかがうことができる。

しかし、よくよく見てみると、『狭衣物語』は傍線部3にあるように、漢詩の前に紀友則の歌も引用されており、和歌と漢詩の二重の引用が示されていることがわかる。同じく漢詩の引用がある二つの物語だが、『狭衣物語』のほうが多重に引用を用いていると言える。加えて、傍線部4の歌を詠んだ後の様子を表す描写では、悲しみを分かち合うことができている『源氏物語』と、悲しみを独りで抱える『狭衣物語』では明らかな違いを呈している。

物語を紐解いてみると、共通点を見出すことができた。

しかし、同時に相異点も目につくようになる。『源氏物語』と『狭衣物語』が類似した作品であるとの知識は、共通点を見せやすくするため、相異点は排除されがちで、相異は違和感のように感じられることすらある。なぜ、そのような違和感が生じるのか。それは、ここで紐解いた物語が、『百首歌合』の番を通して紐解かれた物語であるからである。それは、「百首歌合」を見る前にイメージしていた書物の『源氏物語』と『狭衣物語』とは位相を変えた『源氏物語』と『狭衣物語』である。位相を変えらるとは、異なるということをも表す。

まず『源氏物語』と『狭衣物語』という類似性を指摘される書物があり、その二つの物語の歌を番えるという手法で「百首歌合」が完成した。そのような「百首歌合」の番の歌を解するために改めて紐解く『源氏物語』と『狭衣物語』は、歌を理解するために紐解かれた物語であり、歌の背景にある文脈としての物語と言える。

歌理解のための二つの物語は、左の『源氏物語』歌を内包する物語であり、右の『狭衣物語』歌を内包する物語ではあるが、一つの番であるため、『源氏物語』の歌に番えられた『狭衣物語』の歌が収まる『狭衣物語』であり、『狭衣物語』の歌に番えられた『源氏物語』の歌が収まる『源氏物語』である。

つまり、『源氏物語』から撰出され、『狭衣物語』から撰出された歌は、番えられることで互いに交わり合い、『源氏物語』歌を見るための『源氏物語』、『狭衣物語』歌を見るための『狭衣物語』という面だけでなく、『源氏物語』歌に番えられた『狭衣物語』となり、『狭衣物語』歌に番えられた『源氏物語』となる。

そのため、そこでは当然、書物としての『源氏物語』と『狭衣物語』というレヴェルでは気づかれなかった面が表れる。共通点と同時に相異点を見出したのは、歌理解のための『源氏物語』と『狭衣物語』だからだ。読み手は、番によって、書物としての『源氏物語』と『狭衣物語』には与することができなくなり、その状態で歌理解のための『源氏物語』と『狭衣物語』を見ることとなる。言わば、どこにも拠り所のない宙ぶりの状態になるのである。

そのような宙ぶりの状態こそ、番を見るために必要な方途ではないだろうか。なぜならば、その宙ぶりの状態は、番の歌を理解するために改めて紐解かれた『源氏物語』と『狭衣物語』から得られた事象であるからだ。宙ぶりで見れば視点が変わるため、立脚していた時には見えなかったものが見える。宙ぶりとは切り離れることではない。あくまでもつり上がるのであり、足下は見えている。「百番歌合」に則して言えば、歌理解のための物語から得た概念は

引きずられ続け、引きずりつつ改めて番を番のままとして見るのである。今一度、「百番歌合」四十九番の番を見てみよう。

この四十九番の番の冒頭、番のそれぞれの歌には「かりの常世を立ち別れ」と「常世離れし雁がねの」との同一の句語の使用による、同一のリズムがあると述べた。しかし、これらは相異と言われれば相異とも捉えられる語であり、共通と相異である。それならば、これを足がかりとして番をみてみるとどうなるであろうか。

左歌の初句、「飽かなくに」は、これから展開される歌世界がかなしみであることを示唆する。それを強めるのが「かりの常世を立ち別れ」の句語である。「立ち別れ」てしまえば、「道やまどはむ」とわかつている。わかつていたことは、右歌初句の「知らせばや」によって認識される。知らせたのは何をか。常世を離れてしまった雁がねが、「思いの外に恋ひて鳴く音を」である。つまり、道に惑うとわかつていたけれど、やはりかなしいのだということを再認識し、それを伝えたいのである。この二首は「雁」と「常世を離れる」を中点とした時、「きつとかなしい」と詠む左歌と、「やはりかなしい」と詠む右歌、つまり恋する人物の昔と今の歌のようになっているのである。

そして、実はこれはもう一つの側面も露呈している。そ

れは、書物から番、番から歌理解のための物語、歌理解のための物語からその情報を得た番という流れを経ずとも、番だけで成立し得るということである。なぜならば、先ほどの恋歌としての読みに使用した要素は、「雁」と「常世を離れる」を足がかりとした番内部の歌の歌語だけだからである。物語のどちらかに与することなく、始めから宙づりの状態で歌を眺めれば、より簡単に恋歌としての読みを開くことが可能だったのである。言い換えれば、「百番歌合」やその属する『物語二百番歌合』が、書物から撰出されながらも、独自性を持った一つの作品であることを示していることを指す。番えられた歌の前に物語が存在することは事実であり、それがなければ『物語二百番歌合』は成立しなかったであろう。

しかし、番えられ、『物語二百番歌合』という作品になった以上、それは『源氏物語』や『狭衣物語』と同じ位置にある一つの作品なのだ。それは『源氏物語』と『狭衣物語』は類似しているという意識や、どちらの歌が優位であるなどと言った考えとは何ら関係しないことを示す。

左歌と右歌という独立する二首が番えられることで交わっているから、その歌を理解しようと改めて紐解いた物語には、共通のみならず相異が現れ、物語から宙づりとなり、新たな読みが表れる。「百番歌合」の番と『源氏物語』

と『狭衣物語』という同一の文字列でありながら、その実は、読まれるその都度において、全て位相の異なる物語と言える。しかしそれらは全て同次元にあるからこそ、宙づりの状態になれば全て異なることが理解し得るのである。つまり、『物語二百番歌合』を目にした瞬間から、読み手は様々に異なる事物と遭遇する可能性を手にし、それらは全て異なりながらも『物語二百番歌合』の文字世界の中では融合点を見いだすことができるのだ。そしてその融合点の一つではなく、その時、その読み手によって、その都度発見されるのである。

三

五〇番の番でも、宙づりの状態からは新たな読みが表れる。

五十番

左 須磨の浦にて

恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ

右 高野に参らせ給ふとて

浮舟の便りに行かむわたつ海のそこと教へよ跡の白波

左は光源氏の歌、右は狭衣の歌である。二首から見いだせる共通点は二重傍線で示した「波」の歌語である。この番は詞書が簡略であるため、物語の場面を即座には推測することが困難で、歌理解のための物語が開かれやすくなるう。

光源氏、須磨で憂愁の日々を過す

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、⁵行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なくて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の風を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりけり。琴をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすこう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらん

とうたひたまへるに。⁶人々おどろきて、めでたうおぼゆるに忍ばれで（後略）（『源氏物語』須磨巻・一九八頁）

狭衣、粉河寺に参詣の途中で飛鳥井を思う

妹背山のわたりは見やらるるに、なほ過ぎがたき御心を汲むにや、舟いでえ漕ぎやらす。

「わきかへり水の下にむせびつつさもわびさする吉野川かな

⁵上はつれなく」など口ずさみつつ、からうじて漲りわたるに、かの底の水屑も思し出でられて、ただかばかりの深さだに思ひ入りがたげなるを、いかばかり思ひわびてかなど、向かひたりしさまたちなどよりはじめ、もの深くはなきさまんでひとへにらうたげにあはれなるさまなりしも、ただいま向かひたる心地して、面杖をつきて、水の底を深くながめ入りたまへるまみのけしき言ひ知らずもの思はしげにて、数珠もてはやされたる腕つきなど、世に人のなべて持たらぬ数珠のやうに、めづらしうつつくしげなり。隈なき水の上には、またさまことに光るやうにぞ見えたまふ。かくのみながめ入りたまひて、

浮舟のたよりも見んわたつ海のそこと教へよ跡の白波

あはれにひとりごちたまひて、「是人命終当生切利天上」とうちあげたまへるも、山の鳥獸といふらんものも、耳立つらんかしと尊くいみじきに、あるかぎり賤の男もう

ちしほれぬべきに、いとど三位中将はしほしほとうち泣きたまひける。
〔『狭衣物語』巻二・二九六頁〕

光源氏は須磨で憂愁の日を過ごしている際の歌であり、狭衣は高野山へ参る途中の吉野川で、飛鳥井を思い出している際の歌である。共通する描写としてそれぞれの傍線部5の引き歌があげられる。『源氏物語』においては、中納言行平の「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風」^①の歌が、『狭衣物語』においては、源順の「日を寒み氷も融けぬ池なれや上はつれなき深き我が恋」^②の歌が引かれている。また、傍線部6に示した、歌を聞いた人々が歌に感じ入っている様を表している描写も共通点と言えよう。

そして、その傍線部4から傍線部5まで、それぞれには長い地の文が続く。『源氏物語』においては、須磨で哀愁を感じる光源氏の様子が「波ただこもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりにけり。」などの記述で描かれ、『狭衣物語』においては、飛鳥井を思いだす狭衣の気持ち「ひとへにらうたげにあはれなるさまなりしも、ただいま向かひたる心地して」などと描写されている。これだけの長さが示すもの、それは、今の状態が理想とは異なる状態にあるということの強い訴えでは

ないだろうか。理想とは異なる状態とは、光源氏の立場においては、都から離れた土地で隠棲していること。狭衣の立場においては、恋しい人、飛鳥井が亡くなったということである。そのため、『源氏物語』の中では「思ふ方より風や吹くらむ」と、「思ふ方」つまり都と、都にいる人々への思いを募らせ、『狭衣物語』の中では「そこと教へよ」と、波に飛鳥井の行方を訪ねている。

ただし、『源氏物語』の光源氏はあくまでも政治的な不遇を嘆いており、『狭衣物語』の狭衣は恋の別れを嘆いている。その意味においては同じように理想とは異なる立場にあることを嘆いていても、相異であり、歌理解のための物語において感じ得る共通と相異という概念は、この番においても捉えることができるのだ。

そうであるならば、この番を宙ぶりの状態で見てみるとどうなるのか。五十番の番の歌は、それぞれの物語を紐解くと、今の状態が理想とは異なる状態にあることを嘆く歌だと解された。その読みは引きずられる。引きずった上で、それでも番をそのままで見ると、単純に詞を詞のままに見ることが、まず行うべき行為である。

歌の詞から得られること、それは「思ふ方にいない」とこと、「それを知らない」とことである。より丁寧に言えば、「思ふ方より風が吹くらむ」と「思ふ方」を思うのは、「思

ふ方」にいないからであり、「そこと教へよ」と「そこ」を知りたいと思うのは、「そこ」を知らないからである。つまりこの二首は、〈ない〉ことを〈ない〉と詠んだ歌と言えまいか。〈ない〉からこそ〈ない〉と言えるのであるから、当然といえば当然の歌である。しかし、歌が物語の一部として記されている書物の段階では、歌は前後の内容に即して読まれるため、〈ない〉ことを〈ない〉と、明確に認識するのは容易ではないのではなからうか。

〈ない〉ことはすでに、書物の段階であるのだろう。それを明確に把握し得るのは、番を見、番の歌を理解するための物語を紐解くという過程で宙づりの状態となり、視野を広げ、その状態で番を見たからである。宙づりの状態になることで、詞は新たな読みを見せたと言える。〈ない〉という読みは、書物の段階で捉えられる嘆きなどの読みと同じように捉えることができるのだ。

さらに、この番も番だけを単独で見ることが可能である。光源氏が嘆くのはなぜか、狭衣が嘆くのはなぜかとの理由こそ〈ない〉からである。書物や歌理解のための物語における光源氏や狭衣の心情を読み得るからこそ、番の歌における二人の人物の心情の理由も明確になる。その意味においても、『源氏物語』と『狭衣物語』と番は、独立しながらも同次元にあり、それは宙づりの状態で見ることに

よって、新たな読みを開いていると言えるのではないだろうか。

四

旅部最後の番は五十三番の番である。

五十三番

左 須磨の浦の雨風の騒ぎ、なべての世絶えて尋ねる人もなかりしに、二条の院の御使ばかりいみじきさまにて、そほち参れりしに御文に

紫の上

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらし波間なきころ

右 御心ならざらむことをおぼしめし悩みけるころ
ほかざまに塩焼く煙なびかめや浦風荒く波は寄るとも

これまで、番は番だけで存在できると述べてきたので、この番はまずその立場で見てみたい。

両歌の共通点は、二重傍線部「浦風」と「波」の歌語である。左は「浦風がどれだけ吹いているだろうかと、不安で、袖がかわく間もないほどに涙に咽びている。」との女

の歌であり、それに番えられた右は、「浦風」よって波が寄つてこようと、なびくことがあるだろうか。いや、ない。」との男の歌である。この場合、「浦風」は氣象現象である風との理解がまず第一義となる。しかしこれらは、男と女の歌であり、その要素を加味すれば、「浦風」はその現象にことよせた「求愛」の比喩であると解せ得る。つまり、相手の浮気を心配する女の歌と、浮気などしないので心配するなという男の歌という贈答歌として、この二首を讀むことができるのだ。「百番歌合」の五十三番の番も、番だけで讀むことを可能にしている。

それでは、番えられた歌が収められた物語はどのように記されているのだろうか。

京の紫の上より須磨の光源氏へ消息がある

二条院よりぞ、あながちに、あやしき姿にてそほち参れる。道交ひにてだに、人か何ぞとだに御覧じわくべくもあらず、まづ追ひ払ひつべき賤の男の睦ましうあはれに思さるるも、我ながらかたじけなく屈しにける心のほど思ひ知る。御文に、「あさましく小止みなきことのけしきに、いとど空さへ閉づる心地して、ながめやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらし波間なき

ころ

あはれに悲しきことども書き集めたまへり。ひき開くるより、いとど汀まさりぬべく、かきくらす心地したまふ。

〔源氏物語〕明石巻・二二四頁

狭衣、父より女二宮の降嫁の件を督促される

（前略）「かの御けしきありしみのしろ衣はいとかたじけなきことにこそ。その後、内々にも案内申さぬはいとかひなきやうなりやと。よからん日して侍従内侍ももとにほのめかしたまへ。かしこにも、さやうにもこそ思へ」などのたまふを、⁷あなむつかしや、おりはつべくも思はぬ世に、さやうのことさへひきかかづらはんよ、と聞くに、さこそ暑かはしき夜の衣なりける。「御けしきさやうなどまでは。渡りざまに聞こえさせなせんや。いかが侍らん」とてすさまじげなれば、心に入るまじきなめり、と本意なく思さるれど、かくも只今はえ聞こえたまはで、ものしげなる御けしきなれば、やをら立ちたまふにも、

ほかさまに塩焼く煙なびかめや浦風荒く波は寄るともなど、いな淵ぞ口ずさみたまふめる。

〔狭衣物語〕巻一・六六頁

『源氏物語』の場面は須磨・明石流離潭の第二幕と言える場面である。嵐により、光源氏は明石へ移ることとなり、明石の御方と出会う。その意味においても、この場面は欠かせない場面である。

対する『狭衣物語』の場面は、女二宮の降嫁の件を父から督促される狭衣が描かれており、源氏の宮に心を寄せていた狭衣は、傍線部7で示したように感じている。この場面は、旅のイメージとはとうてい一致点を見ることができない。旅というテーマにおいて、意味を有する場面から撰出された『源氏物語』歌と、旅とはかけ離れた『狭衣物語』歌。相異点が際立ち、共通点を見出すことなどできそうにもない両物語が、それでも一つの番として番られ、番の中では贈答歌として読むことを可能にしている。

さらに拡大すれば、番の贈答歌としての解釈は、『源氏物語』と『狭衣物語』を新たに開くことを可能にする。番の中で浮気を心配する左の女歌は、嵐を心配する心の奥底にある紫の上の不安を表しているかのように物語を読ませ、心配するなど言う右の男歌は、狭衣の源氏の宮への熱い思いを表しているかのように物語内で読ませる。つまり、今度は番が物語を深めるための要素となり、書物から番、番から歌理解のための物語、歌理解のための物語からその情報を得た番、その情報を得た番からそれらが加わっ

た物語へと続いていくのだ。その流れはどこかで止めることも、どこまでも続けることもできる。全ての事物は独立しているため、行為に制限はなく、詞はただ読まれるように確かに〈ある〉だけなのだ。

五

『毎月抄』の中で、定家は次のように記している。

また、歌の大事は詞の用捨にて侍るべし。詞につきて強弱大小候べし。それをよくよく見たためて、強き詞をば一向にこれをつけ、弱き詞をばまた一向にこれを列ね、かくの如く案じ返し案じ返し、太み細みもなくなびらかに聞きにくからぬやうによみなすが、極めて重事にて侍るなり。申さば、すべて詞にあしきもなく宜しきもあるべからず。ただ、続けがらにて歌詞の勝劣侍るべし。

〔毎月抄〕『新編日本古典文学全集』四九八頁

詞を繰り返し考えること。詞はその一文字一文字が重要な要素なのだ。

『百番歌合』は『源氏物語』と『狭衣物語』の物語内から歌を撰出されている。その『源氏物語』と『狭衣物語』

は、類似する物語という点で共通点を抱きやすく、それと同時に、先行していた『源氏物語』が優位に立ちやすくなるものである。旅の部立においても、須磨・明石流離譚において旅のモチーフを内在させる「源氏物語」と、それを有さない「狭衣物語」という予備知識により、『源氏物語』優位は強く意識させられやすいと言えよう。そのようにして見る番は共通がまず目につき、そこからその番の歌を理解するための物語を紐解き始める。そのような物語は、すでに書物としての物語とは異なる、歌理解のための物語となっており、当然のことながら、共通に限らない相異をも見せ、読み手は宙づりの状態になってしまう。その状態に違和感を感じた読み手は、『源氏物語』優位という最大の拠り所へと帰結してしまいがちになる。しかし、その宙づりこそが番を見る方途であり、そうするからこそ番は番として、『源氏物語』は『源氏物語』として、『狭衣物語』は『狭衣物語』として独立していることを知り得るのだ。そうすると、番の二首はさまざまな要素、例えば歌語によって、書物や歌理解のための物語からは想像し難かった、新たな読みを開くこととなる。その読みはさらに、その読みを介して紐解く物語へと、付与されることとなり、そしてその連鎖は読まれつづける限り、開いてゆく可能性を秘めていると言えよう。

定家が「毎月抄」で述べたように、詞をよくよく見てみれば、詞は常になにかと融け合おうとし、拒むことがないことを見つけることができる。もしも『物語二百番歌合』に制作意図があるとすれば、これをそのひとつと数えても良いのではないだろうか。

註

(1) 成立論は以下のようにまとめることができる。

①建永元年（一二〇六）春ころ

竹本元暉・久曾神昇『定家自筆本物語二〇〇番歌合と研究』（未刊国文資料刊行会 昭和三十年）

②建久三〇七年（一一九三）一一九七 ころ

樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』（ひたく書房、昭和五十七年）

③元久三年（一二〇六）以前

池田利夫『日本古典文学影印叢刊十四 物語二百番歌合 風葉和歌集桂切』（日本古典文学会、昭和五十五年）

伊井春樹『物語二百番歌合の本文―定家所持本「源氏物語」の性格―』（『語文』四八、昭和六十二年二月）

④建久期（一一九〇―一一九九）とは言い切れない

田淵句美子『「物語二百番歌合」の成立と構造』（『国語と国文学』八一五、平成十八年五月）

(2) 樋口芳麻呂『源氏狭衣百番歌合考―部類・配列を中心に―』（『愛知大学国文学』十二、昭和四十六年三月）

- (3) 註(1) ④に同じ
- (4) 註(1) ②に同じ
- (5) 東野泰子「源氏狭衣歌合」の番とその形成」(『百舌鳥国文』九、平成元年)
- (6) 『狭衣物語』には伝本が多くあり、伝本によって歌数が多少前後する。
- (7) 註(2) に同じ
- (8) 註(1) ②に同じ
- (9) 『物語二百番歌合』の本文は『王朝物語秀歌選』(上)(樋口芳麻呂校注、岩波文庫)によった。
- (10) 『源氏物語』および『狭衣物語』の本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)により、末尾に頁数をあてた。
- (11) 『続古今和歌集』・羈旅・八六八・中納言行平
- (12) 『源順集』あめつちの歌四八首

(やまもと・みき、白鷗女子高等学校講師)